

技術評論

取締役松本工場長 田中一男

宮地技報も発刊以来、今号で13号目になるが、そもそも技報発刊のきっかけは、鉄骨生産にその端を発していたことを知る人は少ないのではなかろうか。それは、昭和59年に鉄骨生産認定工場の制度が鉄骨建設業協会で作定され、工場をS, A, B, Cのランクに分けることになったのが始まりである。

Sランクと言うのは、Aランク以上であり、鉄骨に関してはどんな物でもつくるだけの技術力と、管理能力を供えた生産工場というイメージで、それぞれの工場を審査した訳である。審査基準は、鉄骨大手FABより技術者が集まり検討委員会を編成し、約1年余りに渡り制作したと記憶している。かく言う私もその一員として参画したのであるが、その時は当社（というより松本工場）が、審査にあたってあれ程苦労するとは予測だにし得なかった。話は少し前に戻るが、SランクのSとは、Special, SuperのSでA, B, Cの様な単なる順位付けとは違うという意味合いを持たせたものである。これは、多分に我々鉄建協としての思惑がからんでいた訳であるが、それを詳しく述べることは差し控えるとして、その結果当然のこととして、宮地を始め大手FABは皆Sランクの申請をし、審査に臨んだのである。

松本工場においても何ヶ月かかけて、資料の整理やら作成を行い、準備万端滞りなく臨んだつもりであったが、いざ本番になると色々な疑問点や問題点が指摘され、Sランク取得もいささか危うい状態になったのである。いくつかの問題点の中で、研究開発に対する取り組み姿勢とその実績という評価項目があり、それが相当大きなウエイトを占めていた。当時、当社の研究開発はおせじでも『良い』といえる体制ではなく、まして松本工場では技術課はあったものの、その力や実績は微々たるものであった。審査員は主として大学の先生方であったが、その時の評価の中に「技報とか、研究論文集の様なものはないのですか？会社として、研究開発を行った集大成として、まとめておくべきものだと思いますが。」という話があった。このことを当時の上前社長に報告した所、すぐその場で「当社も色々研究や技術向上をはかっているの

だ。すぐに技報を作りなさい。」と言われ、発刊の運びとなったのである。

当時を思うとまことに恥ずかしい話である。しかし、今こうして筆を執りながら思うことは、技術開発とか研究という、とかく華やかな先端に行く仕事の様に考えられがちであるが、けっしてそんな物ではないということである。日々の地道な研賛の積み重ねがあって始めて光る一つの結果に結び付くのではないかと思う。特に当社のように、業種そのものがすでに成熟した域に達している産業にあってはなおさらではなかろうか。

松本工場の主力生産品目である鉄骨を見ても、昭和三十年代後半から溶接構造が採り入れられる様になり、昭和39年に日本初の超高層建築である『横浜ドリームランドホテル』を手掛けたが、当時の溶接技術と三十数年経った現在の溶接技術と、根本において何ら変わるものがない様に思える。ただ、その間に何も進歩がないとは言わない。溶接一つを取って見ても手溶接が自動溶接へと変わり、その品質、材質の高級化等色々な改善改良がなされている。

しかし、私が言いたいことは、それにたずさわる人達（技術者）の考え方が大切であるということである。この五年位の間、新入社員の面接を行う機会が何回かあったが、その中で「当社に入社したら何をしたいか？」と言う質問を必ずするのであるが、始めの頃は10人中9人位までが「設計の仕事をしたい」と答え、その後「瀬戸大橋の様な地に残る仕事をしたい」と変わり、最近では「溶接をしたい」とか「組立の様な仕事をしたい」という様に、足が地に着いたと思われるようになってきた。これは、時代の流れを若者なりに敏感に捕らえたものではあろうが、私はこの様な変化を喜ばしいものと受け止めている。そして、我々技術屋もこの様な変化が必要ではないだろうか。

世の中の経済成長が右肩上がりから逆に下がっている時代に、いま一度技術の基本に立ち返ることを考えても良いのではないだろうか。